

# 「賽の河原」の風景

## －摩尼山地蔵堂の考証と復元－

浅川 滋 男

### 1. 序論

#### 1.1. 摩尼山－日本最大の登録名勝

鳥取砂丘に近接する市内覚寺の摩尼山（山号は喜見山・標高357m）は大山、三徳山と並ぶ天台宗の拠点の霊山であり、因幡で生まれた民の靈魂は没後いったん摩尼山に滞留ののち昇天すると信仰されてきた。わたしたちは2009年以来、おもに摩尼寺「奥の院」遺跡と境内建造物の調査研究に取り組み、3冊の報告書〔浅川編2012・2013・2015〕を刊行した。その成果により、2014年には摩尼寺本堂・山門・鐘楼が国登録有形文化財、2016年には文化遺産の集中する摩尼山南半が国登録記念物（名勝地関係）となった。とりわけ誇りうるのは后者であり、登録面積約367,000㎡に及ぶ「日本最大の登録記念物」が県内に誕生した。

2017年度から国・県・市の助成を受け、「摩尼山－歴史性と景観の回復」を主題とする活用整備事業（3年間）が始まった。2017年9月28日、第1回活用整備検討委員会が鳥取市立川の大雲院客間で開催され、文化庁及び県市教委の担当者をオブザーバーに迎え、正式に三年度事業の内容を決定した。初年度（2017）は案内板を門前・奥の院・鷲ヶ峰の3ヶ所に設置し、第2年度（2018）は「奥の院」の基壇整備や庫裏の文化財指定等を予定していたが、7月の集中豪雨で摩尼寺石敷参道が被災したため、その予算確保に行政は奔走した。一方、我々は公立鳥取環境大学特別研究費の助成をうけて登録記念のリーフレットを刊行し（図32）、また11月10日には登録記念物の活用イベントとして「紅葉の摩尼山鷲ヶ峰『賽の河原』石積みトレック」大会を開催した（図6・35）。

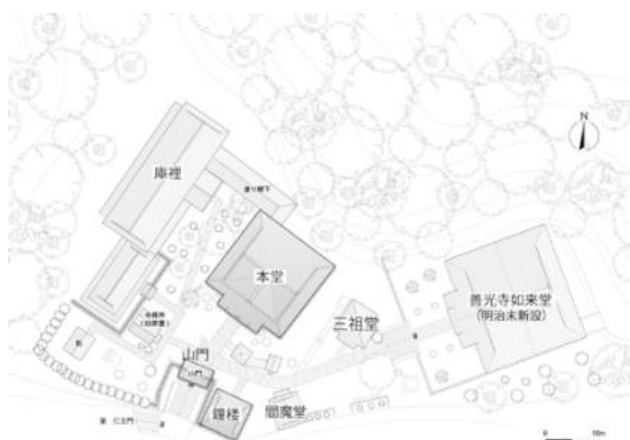


図1 摩尼山寺境内 屋根伏配置図



図2 『稲葉佳景無駄安留記』に描かれた摩尼寺境内図（鳥取県立図書館所蔵）

## 1.2. 研究の目的

このようにして着実に成果をあげてきたわけだが、活用整備事業の進展に伴い、未調査の鷲ヶ峰立岩エリア（図3）で積み残しの研究課題が鮮明になってきた。寺の縁起によると、須弥山の喜見城に住む帝釈天が摩尼宝珠をもって喜見山（摩尼山）鷲ヶ峰の立岩（図4）に降臨したとされ、摩尼寺は帝釈天を本尊とする。帝釈天降臨の立岩周辺は摩尼山の信仰上もっとも重要な場所であり、立岩の前には複数の基壇・礎石・建築部材等が今も残っている。また、摩尼山の案内板やパンフレットなどは、この場所を「賽の河原」と記しているが、現場を訪問しても「賽の河原」に特有な石積み小塔などは見当たらない。以上の諸点に対して歴史的な考察がまったくなされていない状態にあるため、活用整備の方向性を見通しにくくなっている。登録記念物「摩尼山」活用整備事業を成功させるためには、鷲ヶ峰の歴史的景観に係る復元的考察が急務であり、本稿において関係史料を総合的に分析し、この課題に糸口をみいだそうと考えている。

## 2. 摩尼山鷲ヶ峰「賽の河原」

### 2.1. 「賽の河原」と「賽の神」

「賽の河原」とは、幼くして亡くなった子どもらが父母を偲び石を積んで塔をつくる三途の河原であり、全国各地の霊山に分布している。鳥取県内では大山の「賽の河原」がよく知られている。子どもらが河原で石を積んでいると、地獄の鬼があらわれて塔を壊し、「また積み」と命じて消えていく。そこに地藏尊があらわれて、子どもらを慰め天に導くという筋書きである。「賽の河原」とは辺土、すなわち此岸と彼岸の境であり、そこに「塞の神」を祀る。「塞の神」は「賽の神」とも書く。悪霊の侵入を防ぐ（塞ぐ）ため村境・峠・辻などの境界地に祀る神の総称である。鷲ヶ峰の場合、子どもたちの作る石積み塔を壊しにくる「鬼」の侵入を塞ぎ、場所を浄化することを目的として制作されたものと想像される。鷲ヶ峰では、平場に近い山の斜面に大きな陽物（男根）の木彫を安置している。樹の根元を利用して彫刻したもので、これこそが賽の神（道祖神）である。「奥の院」を発掘調査した2010年ころには直截な形状が黒光りしていたが、今は風蝕が進んで摩耗し色あせている。

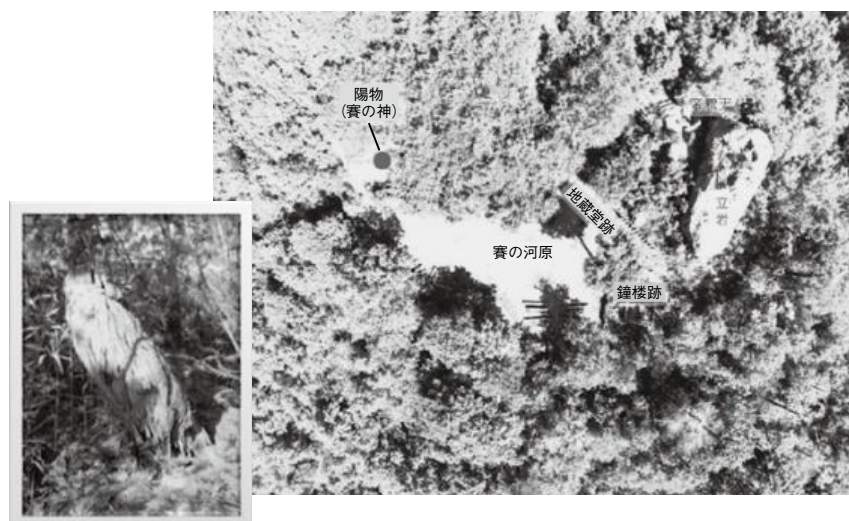


図3 ドローンによる摩尼山鷲ヶ峰の空撮写真と「賽の神」(左)



図4 鷲ヶ峰の立岩と西国三十三霊場観音石仏



図5 『因幡志』(1795) 奥院絶頂 立岩之図  
(明治37年・山本文林堂刊本より転載)

## 2.2. 『因幡志』摩尼山立岩之図にみる「財河原」

阿陪恭庵が寛政7年(1795)ころに書き上げ、その後も加筆したとされる『因幡志』の「摩尼山奥院 邑美郡角寺村上下に記す(二)」には「奥院絶頂 立岩之図」が掲載されている(図5)。中央上側に「堅岩都度高サ凡ソ四丈」の注記がある。立岩らしい巨岩は比較的小さめに表現されており、その付根に「財河原 石佛」とみえる。その周辺の凸凹地形や岩の上に小石を積み上げている。ここにいう「財河原」がまさに「賽の河原」であり、「石佛」とはおそらく地蔵菩薩像であろうと推察される。この風景は自然の荒地であり、建物らしきものは一切表現されていない。18世紀末の段階では、鷲ヶ峰に地蔵堂や鐘楼は存在しなかったということである。なお、『因幡志』に続く米逸処の『稲葉佳景無駄安留記』(1858)は中腹の境内を詳細に描くものの、立岩・奥の院エリアについては記載がない。

## 2.3. 「西院の河原」和讃本

喜見山摩尼寺には「西院(さい)の河原」和讃本が残っている。ここに引用するが、転載にあたって以下の原則を設けた。①繁体字は現行の簡体字に改める。②平仮名も現行の表記に改める。③振り仮名は原本においてほぼすべての漢字に振られているが、ここでは難読文字のみ( )付の送り仮名とするか、平仮名に改める。(下線は筆者による)

これは此世の事ならず	死出の山路の裾野なる	さいの河原の物語り	聞くにつけても憐れなり
二つや三つや四つ五つ	十にもたらぬ嬰子が	さいの河原に集りて	父こいし母こいし
恋し恋しとなく声は	この世の声とは事変り	悲しさ骨身を通す也	かの嬰子の所作として
川原の石をとり集め	これにて回向の塔を組み	一重くんでは父の為	二重くんでは母の為
三重くんでは古里の	兄弟我身と回向して	昼は独りで遊べども	日も入相いの其のころは
地獄の鬼が現われて	やれ汝等は何をする	娑婆に残りし父母は	追善ざぜんの勤めなく
只あけくれの歎きには	むごや可愛や不愍やと	おやの歎きは汝らが	苦患(くげん)を受くる種となる
我を恨むる事なかれと	くろがねの棒をのべ	積みたる塔を押崩す	また積み積みと責めければ
稚子余りの悲しさに	まこと優しき手を合わせ	ゆるし給へと伏し拝む	汝等罪なく思うかや
母の乳房が出ざれば	泣くなく胸を打つときは	八万地獄に響くなり	母はひねもす疲れにて

父が抱かんとする時は 母を放れず泣く声は 天地奈落に響くなり 云いつつ鬼は消失せる  
みねの嵐の音すれば 父かと思うて走せ登り 谷の流れを聞く時は 母かと思うて走せ下り  
あたりを見れども母もなし 誰とて添乳をなすべきや 西や東にかけまわり 石や木の根につまづいて  
手足は血潮に染ながら 幼な心のおじきなや 砂をしきつついし枕 泣なく寝入る折からに  
又清涼のかぜふけば 皆一同に起きあがり 此処や彼処と泣き歩く そのとき能化の地蔵尊  
ゆるぎ出でさせ給ひつつ 何をか歎く幼な児よ なんぢら命短かくて 冥途の旅に来たるなり  
汝が父母娑婆にあり 娑婆と冥途は程遠い 吾を冥途の父ははと 思うて明暮頼めよと  
幼なきものを御衣の 裳（もすそ）の内に搔きいれて 慥れみ給うぞ有難き 未だ歩まず幼な子を  
錫杖の柄に取り付かせ 忍辱慈悲の御膚へに 抱きかかえて撫で擦すり 大悲の乳房を与えつつ  
泣くなく寝入る憐れさは 譬え難き御なみだ 袈裟や衣に浸しつつ 助け給ふぞ地蔵尊

このストーリーにあわせて、2018年11月10日には鷲ヶ峰で小石を積むイベントを開催した（図6）。参加者は学内外から約50名、子ども連れの家族や年配者、学生が摩尼川源流域を遡上して小石を集め、立岩の周辺で石を組み上げた。事務局（研究室）のスタッフは赤鬼や地蔵尊に仮装して雰囲気盛り上げ、最後に石積小塔群に向かって摩尼寺の居川敬信副住職が読経し供養した。

## 2.4. 回向の塔

上の和讃本では「回向の塔」という表現がなにより注目される。回向（えこう）とは「自らの徳を他者に転回すること」である。夭逝した嬰子（みどりご）たちはなぜ「賽の河原」で石を積むのか。石を積むとは、徳を積むことにほかならない。辺土で積んだ徳を娑婆で生きる父母兄弟に転送し、かれらの幸福を一途に願うのである。ちなみに、徳を積み上げた「回向の塔」を剛（はがね）の棒で押崩す破壊者が「地獄の鬼」であり、悲嘆にくれた子どもたちを救い天に導くのが「能化の地蔵尊」である。能化（のうげ）とは「衆生（生きとし生けるもの）を救う指導者」のことである。



図6 鷲ヶ峰での「回向の塔」を積むイベント（2018年11月10日）

### 3. 三祖堂と地藏堂

#### 3.1. 財産台帳にみる三祖堂

三祖堂は摩尼寺の本堂と善光寺阿弥陀如来堂の間に建つ方二間の小堂で、最澄・円仁・空海の像を安置する。後述するように、かつて鷲ヶ峰に存在した地藏堂は三祖堂と平面規模が同じで、明治中期までは近接した位置に軒を連ねていた。大雲院に所蔵される摩尼寺の財産台帳「寺院所有物明細帳」（明治31年）は、以下のように記している。

三祖堂 桁行二間 梁行二間 坪数四坪 享保三年建設

享保三年（1718）については、同台帳に以下の記載もある。

大雲院二世栄春中興開基ス。享保三戊戌年迄大雲院兼帯寺トナル。同年上月同院第五世大僧都観洞之懇願ニ依テ比叡山安楽院ニ属ス。是ヲ以テ観洞和尚ヲ当寺律院ノ開基ト為ス。自爾以来天台律宗規則ニ準ジ大僧ノ輪番寺ト為ス也。明治三年御趣意ニ依テ現今ノ境内ヲ除クノ外悉ク上地トナレリ矣

すなわち、比叡山の安楽律派に改宗した記念すべき享保三年に三祖堂を建立したことになる。それはまた、摩尼寺の境内が「奥の院」から中腹の現在地に移転された年であった可能性もある。ちなみに享保三年という年代は、空海像の注釈にも記されている。

- 一 右脇弘法大師 一幅大ハ壹尺五寸  
由緒。当堂ハ享保三戌年五月当時住持義諦和尚安置ナリ。  
弘法大師当時往昔真言宗ニ所縁アルニ依テ安置スルモノナラン。

#### 3.2. 財産台帳にみる地藏堂

明治31年の「寺院所有物明細帳」のリストには、地藏堂・地藏堂本尊・位牌堂も含まれている。

地藏堂 桁行二間 梁行二間 坪数四坪 延享元年建設  
地藏堂本尊地藏大士 座像大ハ三尺二寸  
由緒。当像ハ延享元年甲子六月唯識院湛洞自坊ニ安置ス菩薩  
位牌堂 桁行二間 梁行二間 坪数四坪 文久二年建設

さらに、「喜見山摩尼寺記録」（大雲院所蔵・年代未確認）という文書には以下の記載を確認できる。

- 地藏堂建立之事
- 一 此度当寺本堂東江式間 四方茅葺ニして 地藏堂一字  
建立仕度儀候、此段奉願候以上 寛保三年五月□日 （□は折り目で読めず）

以上から、以下のように推定することが可能であろう。

- 1) 地蔵堂は寛保三年（1743）に建築申請し、延享元年（1744）に竣工した。
- 2) 地蔵堂の位置は本堂から東方向に二間離れた場所である。ここは文久二年（1862）に位牌堂が建立される。その際、地蔵堂は法界場の右脇に曳き家された可能性がある。
- 3) 地蔵堂は方二間の「四方茅葺」であり、明治の絵葉書（後出）にみる鷲ヶ峰の地蔵堂のような棧瓦葺ではなかった。

### 3.3. 地蔵堂と三祖堂の位置関係

米逸処の『稲葉佳景無駄安留記』（1858）に描かれた摩尼寺中腹の境内図（図2）には、地蔵堂及び三祖堂らしき建物はみえない。しかし、本堂脇の位牌堂より右手を省略しているため、そこに両堂が存在した可能性を否定できないであろう。一方、明治31年「寺院所有物明細帳」付属の指図をみると、境内のいちばん奥にあたる登山路直下の「法界場」を挟んで、本堂に向かって左に地蔵堂、右に三祖堂を対称に配している（図7）。いずれも方二間堂である。摩尼寺における「法界場」は無縁仏を供養する場であり、五輪塔とともに多数の地蔵石仏を安置する。「賽の河原」への入口とみるべき場所である。

## 4. 明治以降の境内と鷲ヶ峰

### 4.1. 絵葉書の古写真とその年代観

これまで発掘調査報告書等で引用してきた絵葉書の古写真には、立岩の左右に地蔵堂・鐘楼・西国三十三霊場観音菩薩（石仏）第1群が写っている。その撮影年代は漠然と昭和戦前もしくはそれ以前と推定してきたが、明治後半にまで遡る可能性がでてきている。まずその上限だが、明治31年「寺院所有物明細帳」には「西国三十三ヶ観音菩薩三十三体が太谷家より明治29年に寄進された」とある。いま西国三十三霊場観音菩薩（石仏）は第1群（11体）が立岩の下、第2・3群（22体）が法界場から鷲ヶ峰に至る登拝路に設置されている。その寄進年代が明治29年（1896）なので、第1群の写しこ

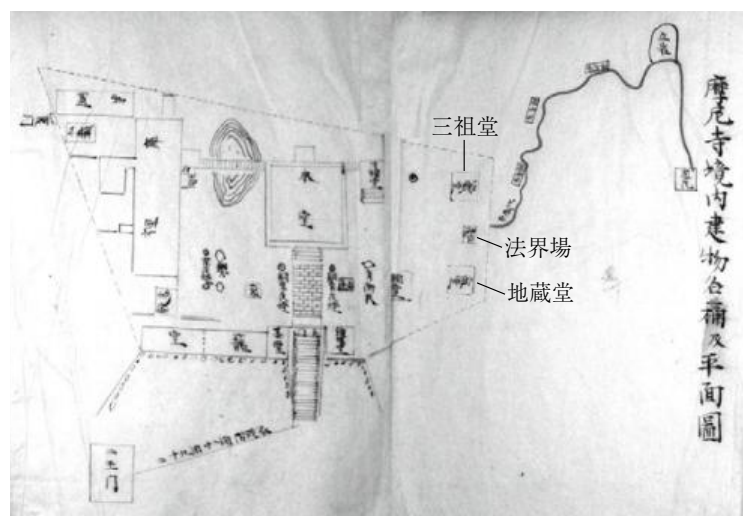


図7 『寺院所有物明細帳』（1898）付図にみる地蔵堂・三祖堂などの配置関係

まれた絵葉書の撮影年代はこの年以降であることが分かる。

ここで推測を逞しくするならば、廃仏毀釈の影響を受けて西国三十三霊場観音菩薩を寄進していた別の寺院が廃絶し、その石仏を摩尼寺に寄進しなおしたのかもしれない。なお、絵葉書に映る地藏堂・鐘楼は撮影年には鷲ヶ峰に存在していたわけだが、この情報だけだと建立年代は撮影年以前としか言いようがない。

#### 4.2. 「喜見山摩尼寺之図」にみる境内と鷲ヶ峰

明治末年（1912）の国鉄山陰線の全通に伴い、鳥取ではさまざまな観光振興事業が展開していた。摩尼山でも、第二の本堂というべき善光寺阿弥陀如来堂がこの年に竣工し、境内全体が整備しなおされたようである。その様子を描写するのが、明治45年刊「喜見山摩尼寺之図」（個人蔵・鳥取市歴史博物館寄託）である（図9）。注目すべきは右寄りの小円内に描かれた鷲ヶ峰の絵であり、地藏堂・西国三十三観音石仏（第1群）・鐘楼を含む。しかも、その構図は絵葉書古写真と同一であり、絵図は写真をトレースしたものとみてよいと思われる。とすれば、この絵葉書もまた山陰線全通関連事業の一環として発刊された可能性が高く、鷲ヶ峰における地藏堂等の建造物も同事業と係わり、明治末直前に竣工をみた可能性を否定できない。

明治31年「寺院所有物明細帳」付図（図7）にみるように、法界場を挟んで左右対称に配置されていた地藏堂と三祖堂は善光寺阿弥陀如来堂の新設にともなって撤去を余儀なくされ、三祖堂は中腹境内の別の場所、地藏堂は鷲ヶ峰に移築もしくは新築された可能性が高いであろう。ただし、地藏堂は古写真にみるように、方二間の規模を維持しているものの、屋根が茅葺きから棧瓦葺きに変わっている。江戸時代から鷲ヶ峰の「賽の河原」は「能化の地藏尊」が出没する辺土として石仏（地藏）を置く程度の荒野であったが、明治末の山陰線全通に伴う整備により、地藏堂を中心におく「西院」伽藍へと変貌を遂げたのではないだろうか。



図8 明治の絵葉書古写真にみる摩尼山鷲ヶ峰（鳥取県立博物館所蔵資料）



図9 明治末年『喜見山摩尼寺之図』（個人蔵・鳥取市歴史博物館寄託）

### 4.3. 焼けた地蔵堂

鷲ヶ峰の立岩脇に建っていた地蔵堂は昭和13年（1938）に参拝者の失火により焼失した。その記事が『因伯時報』昭和13年11月12日に掲載されている。以下はそれを翻刻したものである。（下線は筆者による）

#### 摩尼寺奥の院 地蔵堂全焼 いつ焼けたか誰も知らぬ 貴重な仏像も灰に

因幡の名刹、鳥取市覚寺大字立岩摩尼寺奥の院地蔵堂が何時の間にか全焼してゐることを、茸取が発見届出でにより鳥取署より千熊巡査部長が十日午後現場に出張調査したところ、全焼した地蔵堂は間口二間、奥行二間、木造平屋建黒瓦葺一棟で、外に山林約十歩をも焼失しており、損害は地蔵堂三百円、木製座像丈三尺二寸の本尊地蔵大師百円、木製立像丈三尺五寸の左脇立帝釈天百円、松の雑木三円計五百三円で、出火時刻は去る八日午後六時頃と認められてゐる。

地蔵堂には常に参詣者があり去る六日の日曜日の如きは一日に五十人の参詣者があつて、其の後も一日に十名余の参詣者があつたが、この堂には堂守はおらず、堂にはろうそく立ての設備なきため参詣者が堂前側木製格子戸の辺りにろうそくを立て、これに火を点いたまま下山し、其火が格子戸に燃え移り、遂に堂を全焼したものと見られてゐるが、地蔵堂の焼失中を発見した者はだれ一人としてなく、焼失後松茸狩人が発見したものであつて、木像窃取の上これが犯跡をくらすための放火ではないかと疑問もあり、堂内の木像安置箇所を掘返したところ金属製の像の宝冠及び持物等が現はれたので、窃盗の疑問も解消、全く参詣者の失火と見られてゐる。

## 5. 地蔵堂の構造形式と類例分析

### 5.1. 鷲ヶ峰地蔵堂の構造形式と細部

絵葉書古写真と新聞記事の内容から、明治期の地蔵堂の構造形式等を整理してみよう。



地蔵堂：間口2間×奥行2間、入母屋造平屋建黒瓦葺平入  
正面中央間 格子戸 正面両脇間 花頭窓  
側面建具 舞良戸  
妻飾 木連格子 向拝一間 繫虹梁（海老虹梁）

仏像：①木製座像丈三尺二寸の本尊地蔵大師  
②木製立像丈三尺五寸の左脇立帝釈天



図10 明治の絵葉書古写真  
(県博所蔵) にみる地蔵堂

地蔵堂はその後再建され、昭和40年代まで存続していたという。現在は再建地蔵堂の向拝柱礎石が基壇跡上に残るのみである。なお、鐘楼と西国三十三霊場観音石仏覆屋は昭和13年に焼けていない。鐘楼は近年解体され、西国三十三霊場観音石仏の覆屋もなくなっている。

## 5.2. 類例（1）－摩尼寺三祖堂

地蔵堂の復元を検討するにあたって、摩尼寺境内で最も参考にすべき類例は三祖堂である。すでに述べたように、明治31年の財産台帳付図には境内最奥の法界場の前に方二間の地蔵堂と三祖堂が対称に配置されていた。ともに18世紀前半の創建である。いま中腹の境内に建つ三祖堂は、案内板によると昭和36年（1961）の新築だが、後述するように、古材を少なからず転用している。

三祖堂については、報告書『思い出の摩尼』[浅川編2015：p.13]に短い報告をしている。構造形式と細部をいまいちど整理しておく。

三祖堂：間口2間×奥行2間、方形造平屋建棧瓦葺 角柱土台建  
桁天のり（組物・木鼻なし） 一軒疎垂木 縁なし  
向拝：角柱（礎盤付） 出三斗・実肘木 海老虹梁 木鼻 中備臺股 一軒疎垂木  
建具：正面 2間を四枚引違戸  
側面 手前側1間を板ガラス引違戸（2枚）、奥側1間を木舞壁。  
背面 三祖にあわせて3柱間に分け、いずれも木舞壁とする。

側柱と向拝柱の繋ぎに海老虹梁を使う点は、次に紹介する龍門寺巡礼堂より禅宗様式的だが、側柱に組物はなく、台輪を通してない。向拝は出三斗（皿斗付大斗）とする。海老虹梁の手先延長方向と虹梁型頭貫の外側に木鼻をつけるが、絵様の渦は太いので、幕末～明治期に下るであろう。なお、三斗組上の桁は見かけのもので、桁の内側を実肘木の上側で切り落としている。二間四方の本体は組物のない住宅風であり、向拝のみ派手にして付けたし、全体を仏堂風にみせている。こうした作風は鳥取城下町などに分布する一般の仏堂と同じである。

2014年に国有形登録文化財になった本堂・山門・鐘楼と比較すると、本堂は幕末の安政7年（1860）の建立であるのに対して、山門は明治22年（1889）、鐘楼は明治25年（1892）に下る。本堂と山門・

鐘楼には明治維新をはさんで約30年の時間差があり、それはいわゆる神仏分離・廃仏毀釈の時代なので、仏堂の新築・再建等は困難であったと思われる。したがって、三祖堂は江戸期のものをそのまま継続していた可能性が高い。現在の三祖堂において転用されている古材は、三祖堂もしくは他の方二間堂（位牌堂？）前身建物の材であり、その材の年代は幕末以前か明治中期以降のどちらかと推定される。正面向拝周辺に残る古材（組物・蟬股・虹梁等）は幕末～明治期の絵様を示している。

平面規模は正面・側面とも総長4,000mm（13.2尺）。正面向拝の柱間1,990mm（6.56尺）、側面前側の柱間1,980mm（6.53尺）、側面奥側の柱間2,020mm（6.67尺）、向拝柱の出1,544mm（5.1尺）であり、1間＝6.5（～6.6）尺に復原される。柱は4.5寸角。内部は奥の半間を仏壇とし、三祖並列で祀る。正面（最澄）開放、左右に花頭窓をあしらう。この建具は黒漆の塗装が剥落して材が摩耗しており、また花頭窓の様式自体が古式にみえる。三祖堂創建の享保三年（1718）に遡りうる材として強調しておきたい。摩尼寺の境内全体をみても、安楽律派改宗年に遡りうる建築部材はここにしか存在しない。



図11 摩尼寺 三祖堂

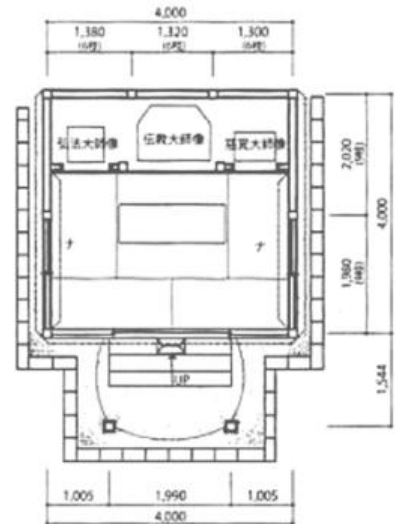


図12 三祖堂 平面図



図13 三祖堂軒下組物

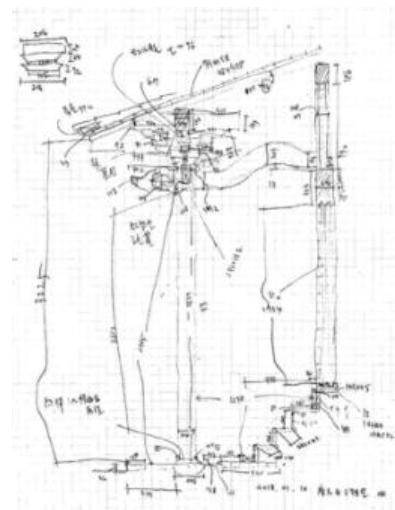


図14 向拝矩測（浅川+吉田侑浩）



図15 三祖堂内陣 花頭窓 (円仁)

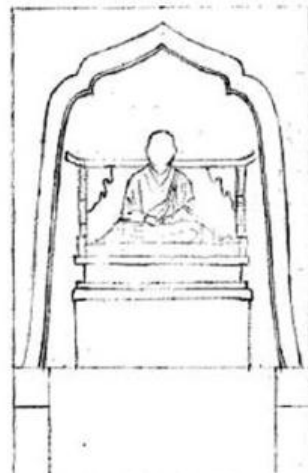
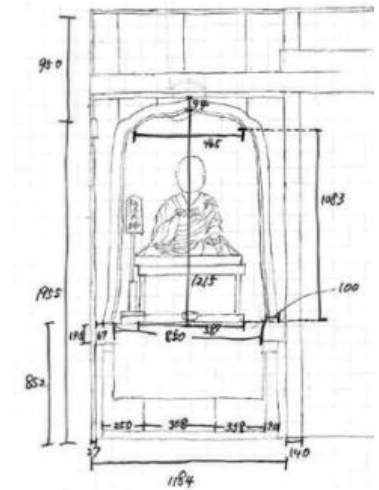


図16 同左花頭窓 実測スケッチ (左：佐々木香奈 右：森 彩夏)



### 5.3. 類例(2) - 龍門寺巡礼堂

摩尼山地蔵堂の復元にあたって参考に値する類例を探したところ、『鳥取県の近世社寺建築』[鳥取県教委 1987] 掲載の寺院で最も近い外観を有するのは会見町(現南部町)の龍門寺巡礼堂であることが分かった。入母屋造仏堂の正面中央に向拝をつけ、左右の脇間に花頭窓を設える外観は地蔵堂とよく似ている。『鳥取県の近世社寺建築』の説明文[p.146]を、以下に全文引用する(一部の文字を繁体字にし、西暦を付加するなどの微細な改変あり)。

#### 83 龍門寺 西伯郡会見町天万748 真言宗醍醐寺派

巡礼堂 正面三間 側面三間 入母屋造 向拝一間 棧瓦葺 天保6年(棟札)  
 角柱土台建 頭貫木鼻 台輪 出三斗 一軒疎垂木 妻飾木連格子  
 向拝角柱 連三斗 繫虹梁 一軒疎垂木 四方切目縁

龍門寺は永享2年(1430)、醍醐寺三宝院末流真言修験宗として護国山常福寺を創建してはじまる。明治の神仏分離令により廃寺となり、大正8年(1919)龍門寺として復活する。伯耆霊場第6番札所で本堂の前方右脇に西面して建つ。巡礼堂は方三間仏堂で、前1間を外陣、後2間を内陣として、内陣床高を外陣より1段上げて内外陣境を引違戸で間仕切る。外陣中央間の側・入側柱頭部を虹梁でつなく形式は中世風である。側廻りの柱上出三斗の手先の斗に肘木を組んで出桁を受ける手法は珍しい。柱頭に粽をつけ、台輪や花頭窓など禪宗様系の意匠を用いて全体に木細く、天保6年(1823)の建築にしては穏やかにまとめている。

新しく赴任した現住職は堂宇の傷みを憂い、巡礼堂の屋根・壁・建具などを改修した。一点、報告書と矛盾する発言を聞いた。本堂・巡礼堂とも、もとは茅葺きであったが、雨漏り等ひどいので本堂は鉄板で被覆し、巡礼堂はスレート葺きにしたとのことだが、報告書[鳥取県教委 1987]掲載の巡礼堂の写真は上の記載どおり棧瓦葺になっている。棧瓦からスレートに葺材を換えたというのが正しい理解であろう。



図17 龍門寺巡礼堂 (2017年末撮影)

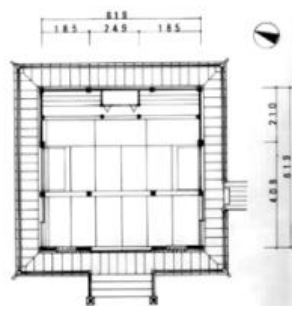


図18 巡礼堂平面図

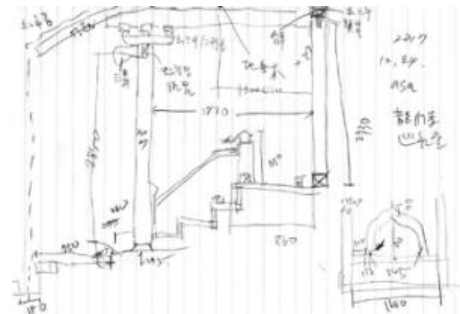


図19 巡礼堂 矩計スケッチ (浅川)

まず方三間の平面寸法について分析する。1尺=303mmとして、本体の平面は6,190mm (20.4尺) 四方。柱間寸法は、

桁行： 左右の脇間 1,850mm (6.1尺) 中央間249mm (8.2尺)

梁行： 仏壇側1間 210mm (6.9尺) 手前2間 409mm (13.5尺)

である。向拝柱の出は『鳥取県の近世社寺建築』に記載がないので、現地で実測したところ、側柱一向拝柱の心々寸法は2042.5mm (6.7尺) を測る。ちなみに、縁の出は860mm (2.8尺) である。

『鳥取県の近世社寺建築』[1987:p.146]の記載にあるように、龍門寺巡礼堂は台輪・花頭窓・柱頭粽(および向拝柱の礎盤)は禅宗様系だが、繫虹梁は海老虹梁ではなく、虹梁型頭貫と同じ標準のタイプにしている。対して、摩尼寺境内の三祖堂や古写真にみる地藏堂は曲がりの強い海老虹梁を採用しており、この点のみに注目すると龍門寺巡礼堂よりも禅宗様の色彩がやや強いと言えるが、組物などは素朴に抑えている。さらに、向拝柱上の大斗を皿斗付大斗にしており、三祖堂と共通する。

龍門寺巡礼堂は三間 (6,190mm) 四方、摩尼寺三祖堂(および地藏堂?)は二間 (4,000mm) 四方なので、後者は前者の65%縮小とみなせる。この縮小率は、地藏堂跡の復元にあたって有効な数値となるであろう。ただし摩尼寺の場合、1間が6尺か6尺5寸かは未確定であり、検討の余地がある。本論ではいまいちど三祖堂と地藏堂・鐘楼跡地の寸法体系を分析することで正確な縮尺率を導き出していく。

## 6. 鷲ヶ峰地藏堂跡の遺構解釈と復元

### 6.1. 地藏堂跡の遺構解釈と基準尺

鷲ヶ峰の立岩と平場の間にL字形の基壇風の高まりがあり、北側に地藏堂、南東側に鐘楼が建っていた。また両者の中間には西国三十三観音霊場石仏の第1群11体が低い切妻造の瓦屋根に覆われていた。こうした風景が、何度も述べてきたように、明治末撮影の絵葉書古写真に写しこまれている。

地藏堂と三祖堂は創建年代が18世紀前半に遡り、平面規模も正面向拝付方二間で共通する。明治期には法界堂の前に左右対称に建っていた双子の兄弟のような建物であった。図20は、地藏堂跡地の実測図である。研究室OBの岡垣頼和君(鳥取市教委文化財課)に依頼して三祖堂の平面と基壇遺構を対比してもらった。昭和期の向拝柱礎石に柱位置をあわせてみると、基壇遺構のなかに向拝付方二間の三祖堂平面がびたりと納まる。

問題は基準尺だが、頼りになるのは基壇上に残る向拝柱の礎石しかない。ところが、この二つの礎

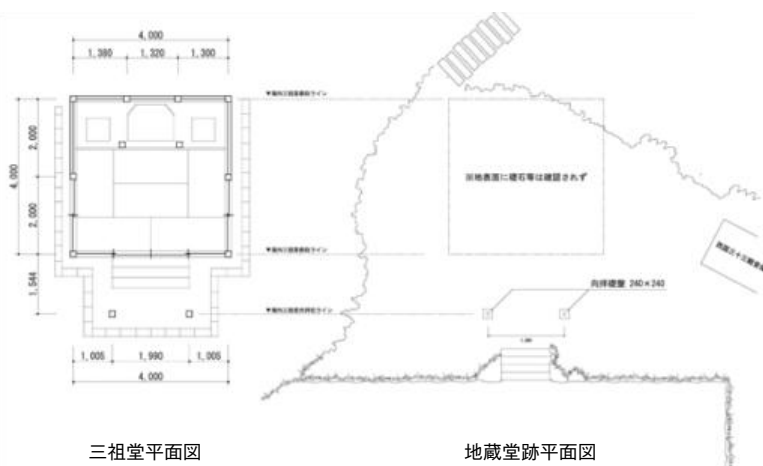


図20 地蔵堂跡地と三祖堂平面の比較 (岡垣頼和作成)



図21 摩尼山鷲ヶ峰 配置図・地蔵堂基壇測量図 (浅川研究室測量・宮本正崇作図)

石は昭和13年の火災焼失後に再建された新しい地蔵堂の基礎であり、明治期のものではないという憾みがある。しかし、今回はこれに頼るしかない。岡垣君の実測図によると、向拝柱の心々柱間寸法は1,960mm (6.47尺)である。中腹境内に現存する三祖堂の向拝柱間は1,990mm (6.56尺)、閻魔堂は1,969mm (6.50尺)を測る。手測りの誤差を考慮するならば、いずれの柱間計画寸法も6.5尺とみるべきであろう。すなわち、地蔵堂・三祖堂・閻魔堂においては、1間=6.5尺の基準尺を用いていたと考えたい。

## 6.2. 地蔵堂の復元

以上の前提をもとに地蔵堂の平面を復元すると以下の寸法になる。下線は三祖堂から借用した寸法を示す。

地蔵堂： 方二間 13尺 (3,939mm) × 13尺 (3,939mm)  
 側面・背面の1間 及び 向拝柱間 (正面格子戸中央間) 6.5尺 (1,970mm)  
 正面左右の脇間 半間 = 3.25尺 (985mm) 向拝柱の出 5尺 (1,515mm)

この平面をもとに地蔵堂の上屋を復元するわけだが、特記すべき点を箇条書きしておく。

- ①地蔵堂と三祖堂は同規模の方二間堂であり、地蔵堂の復元にあたっては原則として三祖堂の矩計(図14)を借用する。ただし、屋根形式は異なる(地蔵堂は入母屋、三祖堂は方形)。
- ②三祖堂内部の花頭窓を地蔵堂正面脇間に使えるだろうと予想していたが、明治31年の財産台帳によると、三祖堂は安楽律派改宗の享保三年(1718)に創建されており、花頭窓を含む三祖堂内外陣境の建具は当初材を継承している可能性が高まった。明治の絵葉書に写る地蔵堂を復元する場合、天保六年(1823)の龍門寺巡礼堂正面脇間の花頭窓を65%圧縮したデザインにするか、三祖堂内外陣境の花頭窓をそのまま採用するかは要検討であり、以下の3案を比較検討した。

- A案：三祖堂内外陣境花頭窓をほぼそのまま採用
- B案：龍門寺巡礼堂花頭窓圧縮採用案
- C案：B案を古写真にあわせて縦横比調整



図22 立面図比較 (花頭窓の比較検討) 左から、A案・B案・C案 宮本正崇作図

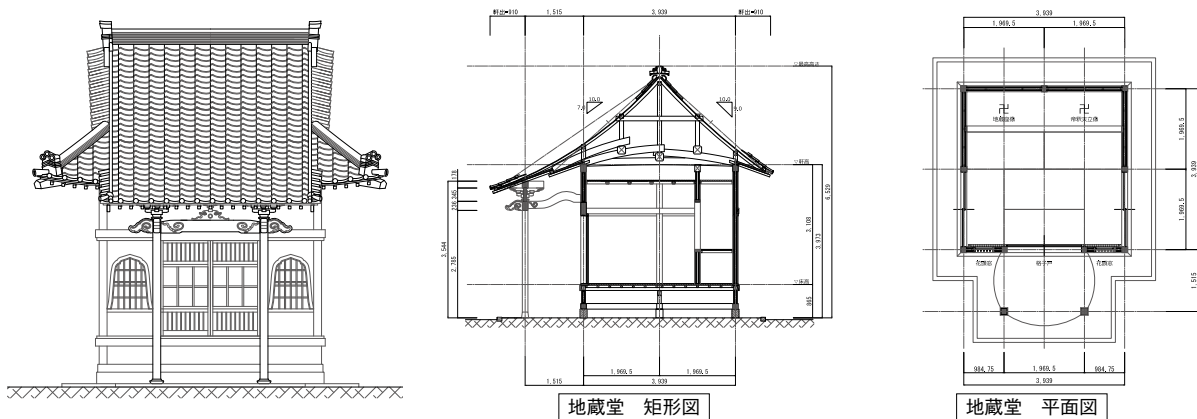


図23 地蔵堂復元図 (立面・断面・平面) 宮本正崇作図

図22にみるとおり、古写真に近いのはA案もしくはC案であろう。しかし、類例の縦横比を調整するという方法は復元のあり方としてはあまり適切ではない（B案のように全体の比例を維持しながら縮小・拡大するのはありうる）。結果、A案を採用することとした。A案は三祖堂内外陣境の花頭窓であり、当初建立の享保三年（1718）に遡る可能性がある。この可能性を鵜呑みにするわけにはいかないが、かりに地蔵堂の花頭窓がこれに近い形式であったとすれば、明治31年「寺院所有物明細帳」の記載する地蔵堂の延享元年（1744）建立説の傍証になるかもしれない。

③地蔵堂の入母屋造屋根も龍門寺巡礼堂を借用すべきだが、巡礼堂は出桁を出三斗で支えているので、少し大きめになっている。地蔵堂は桁天のりなので65%縮小よりさらに縮小すべきであり、60%前後が妥当ではないかと推定される。

④明治の絵葉書古写真にみえる地蔵堂は境内にあった茅葺きの地蔵堂（財産台帳に記載あり）を移築して棧瓦葺きにした可能性が高いと思われる。屋根勾配が強くみえるのはそのせいだろう。龍門寺巡礼堂も茅葺きから棧瓦葺きに変化している。結果を述べるならば、三祖堂の方形造瓦葺きより強い勾配の7/10（正面）、9/10（背面）とした。

⑤昭和13年11月12日の『因伯時報』にいう焼失地蔵堂の「堂前側木製格子戸」が古写真では格子戸にみえない。ガラス戸の上下羽目板に縦連子を並べている。いわゆる「盲連子」であり、これを記者は格子と表現したのだろうと考えた。なお、三祖堂敷居の溝は1本であり、引違戸ではなく、両引戸に復元した。両側の花頭窓の背面に片引き戸を隠す。

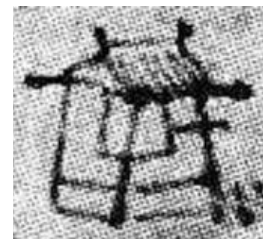
## 7. 鷲ヶ峰の鐘楼

### 7.1. 絵葉書古写真にみる鐘楼

摩尼山鷲ヶ峰を写した戦前の絵葉書をみると、立岩の脇に地蔵堂を配し、その東南脇に鐘楼をともなう（図24中）。鐘楼もすでに解体され立岩周辺の平場に礎石を残しつつ、その上に古材（図25・26）が積み上げられている。地蔵堂と直交関係をもって基壇上に建つ鐘楼は素朴な構造をしている。古写真から看取できる構造形式・細部を以下にまとめる。



（↑鳥取県立博物館所蔵）



（↑鳥取県立図書館所蔵）

図24 鐘楼の比較（左から摩尼寺境内に建つ鐘楼、絵葉書古写真にみる鐘楼、『稲葉佳景無駄安留記』にみえる鐘楼）

鐘楼： 方一間 切妻造鉄板葺平入 四面開放

内転びのある角柱に腰貫・飛貫を通し、柱頭部は梁（虹梁型頭貫か）、桁の順にのせて固める。古式な折置組である。礎石建の土台なし。小屋組は束立。棟木と軒桁に垂木をわたし、妻飾の破風板で隠す。おそらく野小屋のない化粧屋根裏で、屋根勾配は5 / 10前後、軒の出は1.5尺ばかり。人間との対比からみて、柱高は3,000mm前後と推定される。

## 7.2. 鷲ヶ峰の鐘楼跡と建築部材

鐘楼の基壇上には4基の礎石が残っている。礎石は450mm×550mm程度の自然石であり、平らな上面の中心部分に45mm角の孔をあけている（図25）。これは柱下端に削り出したホゾを納めた孔であろう。4つのホゾ孔から平面寸法が復元できる。

鐘楼平面寸法：桁行3,090mm（10.2尺）×梁間2,970mm（9.8尺）

手測りの誤差を考慮するならば、復元設計においては10尺四方とみなせばよいかもしれない。なお、4基の礎石の北側に小さな自然石が2基露出し、上に木材を横たえているが、これらは鐘楼そのものとはまったく関係ない。礎石の上面・周辺にはあわせて7本の角材が姿をとどめている（図26）。これら7本はA群（4本）とB群（3本）に大別できる。

A群： 4本の角材。長さは2,630mm（8.76尺）、2,665mm（8.80尺）、2,670mm（8.81尺）、2,680mm（8.84尺）を測る。断面は3材の採寸をしており、180×205mm（5.9×6.8寸）、186×200mm（6.1×6.6寸）、189×210mm（6.2×6.9寸）を測る。手測りの誤差、木材の収縮・磨耗を考慮するならば、柱高は9尺（2,727mm）、断面は6.0×7.0寸に復元すべきか。柱の側面に腰貫と飛貫の貫孔を2段に残すので柱材とみてよいだろう。貫孔は70×120mm程度のものと90×220mm程度のものがあり、両者は背違いになっている。古写真をみる限りおそらく前者が梁行方向の貫、後者は桁行方向の貫を納めたものであろう。柱底面は磨耗が激しく、削り出しのホゾを残すものは一例のみである。

B群： 3本の板状の材。長さ3～4mに及ぶ。この長さにふさわしいのは棟木と2本の軒桁だが、



図25 鐘楼遺構と建築部材のドローン空撮写真

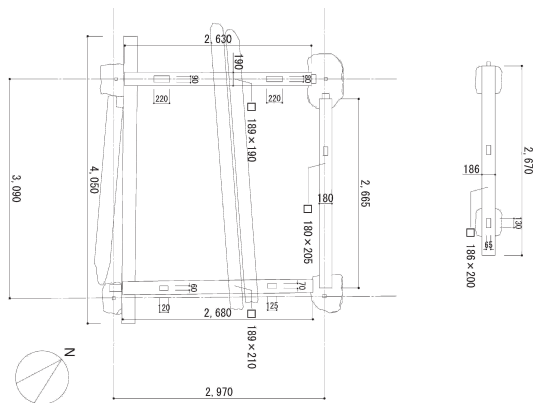


図26 鐘楼遺構と建築部材の実測平面図



そうであるならば角材の断面を有するはずである。板状の貫とみるのが妥当かもしれないが、4m材は長すぎる。以上から復元寸法を以下のように設定する（1尺=303mm）。

鐘楼復元寸法：方一間 10尺四方 柱高9尺 同断面6×7寸

### 7.3. 境内に建つ現鐘楼

鷲ヶ峰の地藏堂を復元するにあたって、第一に参照すべき類例は摩尼寺境内に現存する鐘楼であろう。鐘楼は山門・本堂とともに国の登録有形文化財になり、その申請文書を改稿した解説文を報告書『思い出の摩尼』[浅川編2015:p.12]に掲載してある（図24左）。財産台帳によれば、鐘楼は明治25年（1892）の建築である。現鐘楼は平屋建入母屋造棧瓦葺で、平面は方一間。桁行4,080mm（13.47尺）×梁間3,897mm（12.86尺）を測る。これをおよそ13尺四方と理解すると、鷲ヶ峰鐘楼はおよそ10尺四方だから、一辺は鷲ヶ峰の1.3倍、面積では1.69倍となる。

境内の鐘楼は四面開放で腰貫、飛貫を通すところは鷲ヶ峰の鐘楼と同じだが、柱頭は頭貫で固めて台輪をのせ、三斗組の組物、中備墓股、木鼻を設ける。また、柱底部は礎石上の礎盤にのっており、台輪とあわせて禅宗様の匂いが仄かにする。入母屋造の屋根には野小屋があり、軒下からみえる疎垂木は化粧垂木である。垂直方向の高さを柱高で比較すると、境内鐘楼は4,148mm（13.67尺）であり、柱間よりも長い。一方、鷲ヶ峰の鐘楼は柱間が10尺、柱高が9尺と推定され、柱間より短くなっており、また、柱の内転びも境内鐘楼のほうが強くみえる。つまり山上と山下では、鐘楼の様式が大きく異なり、丈が低く内転び逓減率の弱い後者のほうが古式にみえる。

### 7.4. 『稲葉佳景無駄安留記』にみえる鐘楼との比較

現鐘楼は境内地を前側にせり出して広げつつ、明治25年（1892）、その拡張域の山門脇に建てられたものである。鷲ヶ峰の地藏堂は明治中期以降における山下境内の整備と軌を一にしておこなわれた可能性もあるが、だとすれば、山上の鐘楼もこの時期に新築されたのであろうか。上の様式差はこの問いに対して否定的な見通しを与えている。山上の鐘楼は、その素朴な構法に加えて、軒高・棟高の低さ、柱の内転びの緩さなど古式な風貌を示しており、江戸期に遡る可能性を示している。とすれば、明治維新以前に鷲ヶ峰に建立されていたのだろうか。その可能性を否定できるわけではない。

ここで、米逸処の『稲葉佳景無駄安留記』（1858）の描く摩尼寺境内に注目すると、小ぶりの鐘楼が描かれている（図24右）。それは「秀衡杉」の斜め前、おそらく今の閻魔堂に近い位置に存在した。構造形式は、平屋建・切妻造鉄板葺で、腰貫も描かれており、明治の絵葉書古写真にみえる鷲ヶ峰の鐘楼とよく似ている。両者が同一の建築であるという保証はないけれども、拡張した敷地に大型の鐘楼を新設した結果、不要になった小型の鐘楼を鷲ヶ峰に移築した可能性もあるのではないか。

### 7.5. 山上鐘楼の復元

こうしてみると、鷲ヶ峰鐘楼の部材寸法を参照する類例として境内の鐘楼は必ずしもふさわしくないことが分かる。そこで、県内で参考になりそうな平屋建切妻造の鐘楼遺構をざっと調べてみたのだ

が、大山寺、三徳山三仏寺、廣禅寺（鳥取市）などの鐘楼は重要な類例ではあるけれども、いずれも近代の再建で、柱頭より上の組物・虹梁・木鼻などを派手につくり、鷲ヶ峰鐘楼の素朴さとはかけ離れている。このたびは古写真と現存遺構・部材から寸法と様式を推定するのが無難と判断し、復元平面図・断面図を描いてみた（図27）。

## 7.6. 西国三十三観音石仏覆屋の復元

古写真をみる限り、地藏堂と鐘楼の中間に建つ石仏群覆屋の間口は3柱間で、中央の柱間が両脇間に比べてやや長いようである（図28）。これについては、中央間 = 7尺(2,121mm)、両脇間 = 5尺(1,515)と仮定する。両側の妻壁は棟通りを軸線にして対称に2本の柱を配して柱間を土壁とし、その安定を図るため土台を前後にのばし、筋交状のつかい棒で柱を支えている。

石仏群覆屋の構造は単純なようで結構複雑である。構造形式は平屋建切妻造鉄板葺平入。棟に来待石をのせる。基壇は崩れかかっているの寸法が微妙だが、間口17尺(5,151mm)×奥行5尺(1,515mm)に復元した。基礎は土台建。写真に映る人体との比較から、棟高6尺、軒高4.5尺と仮定し復元図を描いた（図29・30）。

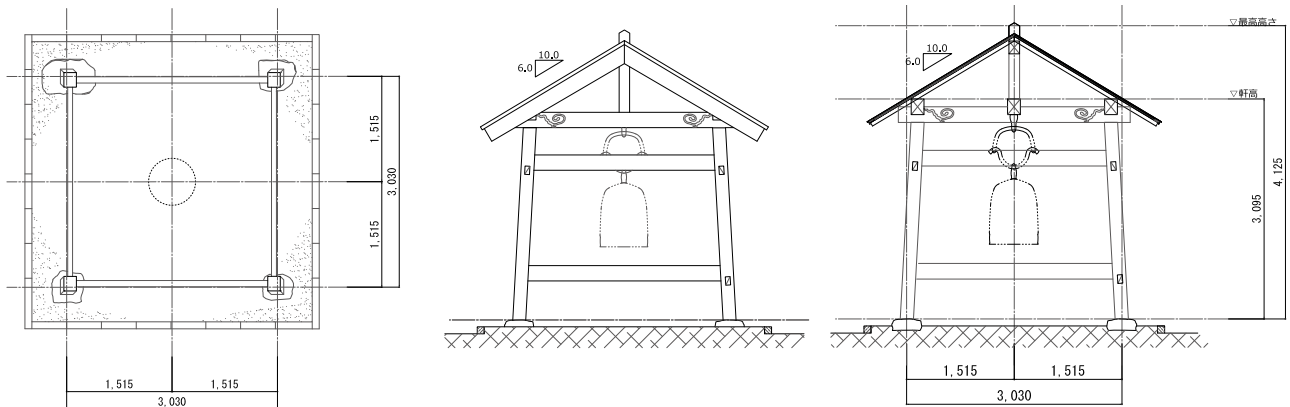


図27 鐘楼 復原図（平面・立面・断面） 宮本正崇作図



図28 絵葉書古写真にみる西国三十三観音石仏覆  
(鳥取県立博物館所蔵)

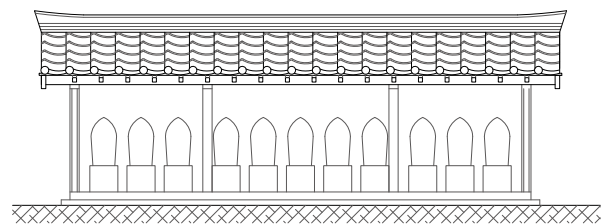


図29 西国三十三観音石仏覆屋復元図（立面）

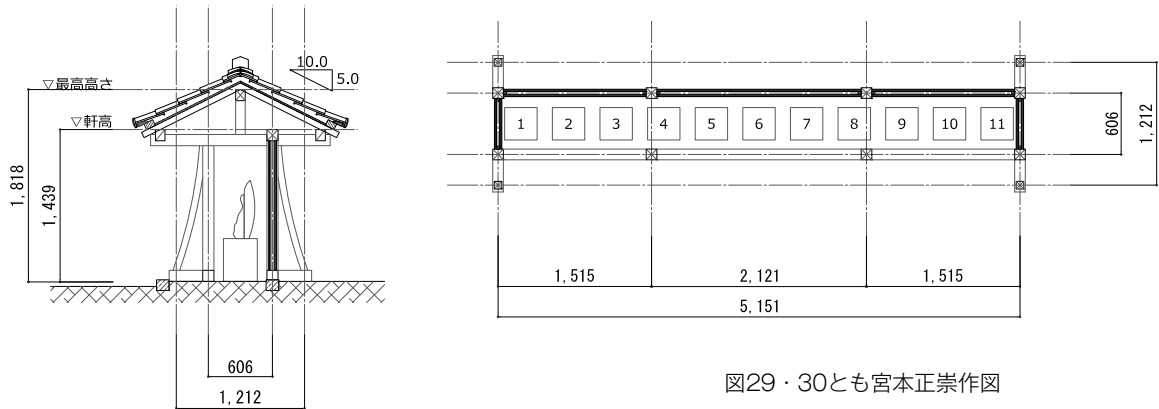


図29・30とも宮本正崇作図

図30 西国三十三観音石仏覆屋復元図（断面・平面）

## 8. 復元連続立面図と復元CG

以上を総合して、鷲ヶ峰の明治期建造物群を連続立面図（展開図）として表現した（図31）。背景に描いた立岩の高さについては、正確な寸法を得ていないが、測量時の調査風景写真に映る人物との対比などから、『因幡志』に記す「高サ四丈」すなわち約12m説は妥当であると判断した。

さらに以上の復元図を3D化し、地上写真・ドローン空撮写真と融合させ、明治後期の景観を再現した。こうして、明治期の鷲ヶ峰の景観復元に取り組んだわけだが、わたしたちは地蔵堂・鐘楼・西国三十三観音石仏覆屋などの復元建設を目的としてこの研究に取り組んだわけではない。はじめに述べたように、今回おこなった復元研究が今後の景観整備や活用事業の指針となることを願ってのことである。その手始めに、登録記念物「摩尼山」の登録記念リーフレットに復元CGと連続立面図を掲載した（図32）。これらの成果が摩尼山の歴史理解の普及と深化に貢献することを祈っている。

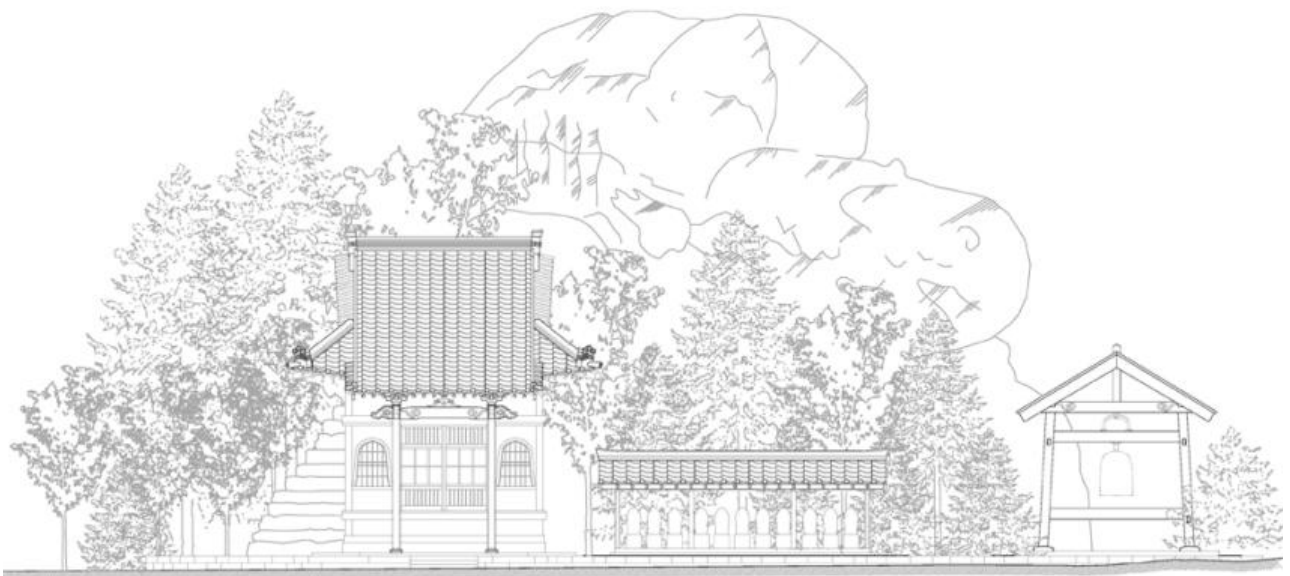


図31 鷲ヶ峰の復元連続立面図（展開図） 宮本正崇作図

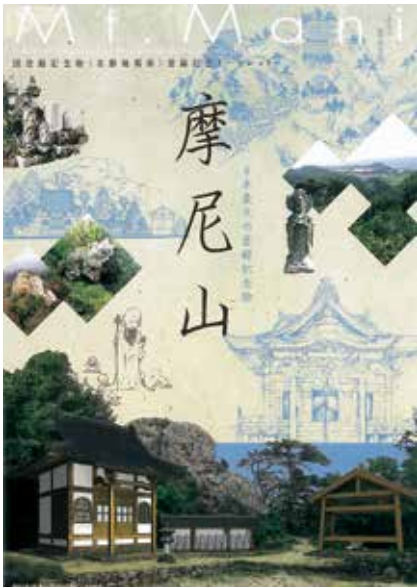


図32 登録記念物「摩尼山」  
登録記念リーフレット  
[参考文献4]



図33 鷲ヶ峰（明治末）の景観を再現した復元CG [宮本正崇制作]



図34 鷲ヶ峰（明治末）の景観を再現した復元CG [ドローン空撮写真との融合 宮本正崇制作]

**【謝辞】** 本稿は平成30年度公立鳥取環境大学特別研究費助成「登録記念物『摩尼山』の景観整備に関する基礎的研究－賽の河原と地藏堂の復元を中心に－」（代表者・浅川）の成果の一部をなす。本研究の遂行にあたり、研究室OBの宮本正崇（mts建築設計事務所代表）・岡垣頼和（鳥取市教育委員会文化財課）両君には図面作成と資料収集の両面でたいへんお世話になった。また、古文書の翻刻では眞田廣幸氏ご夫妻のご指導をうけた。さらに、2018年11月開催の「賽の河原」トレック・イベントでは摩尼寺副住職の居川敬信氏と門脇茶屋さんにもご支援いただいた。記して感謝申し上げます。そして、なにより驚ヶ峰の調査研究とイベント活動に係った以下のゼミ生諸君に改めて深い感謝の気持ちを表します。

岡崎滉平 垣崎香菜 谷口希美 水田梨乃 吉田侑浩 吉富博子  
佐々木香奈 森 彩夏 葛蓓莉 谷 愛香 野表 佑 野口さやか

なお、本稿のレイアウトは森と岡崎が担当した。

### 【参考文献】

- 〔1〕浅川滋男編（2012）『摩尼寺「奥の院」遺跡－発掘調査と復元研究－』平成22～24年度科学研究費基盤研究（C）成果報告書、公立鳥取環境大学
- 〔2〕浅川滋男編（2013）『聖なる巖－巖の建築をめぐる比較研究－』平成24年度公立鳥取環境大学特別研究費成果報告書
- 〔3〕浅川滋男編（2015）『思い出の摩尼－建造物の調査と景勝地トライアングルの構想－』公立鳥取環境大学特別研究費成果報告書
- 〔4〕浅川滋男+QTC（2018）『国登録記念物（名勝地関係）「摩尼山」登録記念リーフレット』公立鳥取環境大学保存修復スタジオ
- 〔5〕田中寅男編（1983）『摩尼みちの自然と摩尼寺の歴史－摩尼さんまいるのガイドブック－』蛍光社
- 〔6〕鳥取県教育委員会（1987）『鳥取県の近世社寺建築』
- 〔7〕田中新次郎（1958）『因幡の摩尼寺』鳥取県民俗研究会



図35 摩尼山「賽の河原」石積みイベント記念写真  
(学生のみ 2018年11月10日)